社会福祉法人悠和会　銀河の里

あまのがわ通信

45

2006　4月号

編集 銀河の里広報委員会
代表　清水康宏
発行　銀河の里
〒025－0013
岩手県花巻市幸田4－116－1
TEL (0198)32-1788
FAX (0198)32-1757
E-mail:yuyu@mx51.et.tiki.ne.jp

ワークを考える③

宮澤　健

認知症になったAさんが「夜ひとりで出歩いてしまう。誰がどう見るんだ」。というのが現場の民生委員さんの問いだった。「仕事は5時までです」というのが市役所の答え。出歩いている人を引き取るサービスはありませんとヘルパーステーションも言う。どこも当たり前の話をしてくる。その正しすぎる答えが頭にくるのだ。現実の問題を前にして、正しいことを言われて否定されることほど、問題を抱えたものにとって、腹の立つことはない。

民生委員さんは怒りを腹に抱えたまま相談に見えた。私はせっかく話を頂いた機会に、長年の思いであった関係機関の連絡会を設けて話し合いたかった。私個人が願っても、誰も相手にしてくれないが、困難ケースの威力はすごい。多くの専門家を困らせ、集める力がある。さらにその集まりの中で若いケースワーカーも育て、力をつけさせるのだから、結果として「すごい」。Aさんは事実、念願だった地域ケア会議を実現してくれた。前述したように、それは市をはじめ各関係機関から大勢の集まる立派なケース会議になった。

しかしその雰囲気は当然明るいものではなかった。どこか険悪な感じきえ漂っていた。その一番の原因は「誰が悪いか」「誰が責任をとるのか」といった悪者探しにあった。誰が悪いのか、誰に責任をとらせるのかというのは「世間様」の論理である。日本の社会で世間様が幅をきかすのは、しかたないこととしても、ケースワーカーやソーシャルワーカーが世間様の論理で話をするのは専門家としては恥ずかしいことだ。「誰が悪いのか」というのは自分は悪くないと言っているだけで、「誰に責任をとらせるか」というのは自分は関わりたくないという態度に過ぎない。まずは引き受け、抱えるところにワーカーとしての基本的態度があると思う。そうでないならワーカーが何を使命とするのかわからない。

世間様論理で会議が進むと、とても居心地が悪い。ただ、キーパーソン探しと、悪者探しはラインとしては、とても似通った線にありながら似て非なる所がある。とりあえず親戚縁者の洗い出しが続く。結果として首都圏に在住の一人息子に至る。親の面倒を見る気があるのか、周囲の他人にこれほど迷惑をかけているのにと世間様のお怒りが続く。「息子はたまに来たって誰にも挨拶一つしやしない」まず決まり文句だ。裏返して考えると直ぐ解ることだが、「面倒見てやっているんだから挨拶ぐらいしろ」と思っているところには、挨拶に行きにくい。さらに世間様は息子に対して、金を出す気も面倒を見る気もない人間味のかけらもない悪人のイメージを膨らませていく。

「息子さんと連絡をとりあっている方は」と問うが誰もいない。ところが、ヘルパーさんの感触では、年に何回か帰省してきて、奥さんがとても優しく接している。その接し方は、息子の父親思いの気持ちが奥さんを通して出ているように感じると言うのだ。現場の感覚はこういうところでものをいう。客観的な立場を貫く世間様とはだいぶ違う。

離れたところから勝手な想像をしていても実際とはかけ離れるが、親子のやりとりを間近で見たヘルパーさんの感触は重要だった。世間様は市役所から息子に連絡を取ってもらいたいという話になっていったが、市からの連絡では上から来た感じになるだろうから、私が連絡してみることにした。今後の施設入居を想定するにせよ、親族の息子さんは重要であり、何より離れたところに住んでいて実際には何ともできなくて困っているはずの長男をいかに支えるかがワークの支柱になると感じたからだった。

（続く）

新デイサービスセンター「銀河の里」開所

外観（全体・玄関）と室内（和室・リビング）の様子

デイサービスセンターも早いもので6年目を迎えることとなりました。

最近では定員である10名の利用日がほとんどとなり、新規の利用の相談や利用回数増の相談に応じきれない状態でした。

そこでこの度、花巻市本館の住宅を改修し、この4月1日より新しいデイサービスを開所することとなりました。

既存のデイサービス（花巻市幸田）とは、設備も雰囲気も違います。ここで新たな出会いや関わりが生まれることをこれから楽しみにしたいと思います。

今後ともどうぞよろしくお願いします。

里のひとこま
3月末～4月初

編集後記

先日、突然の大風で我が家の庭の梅の木が倒れた。私にとっては、幼少の頃から慣れ親しんだ梅の木。この木に登って遊んだり、その横で自分の節目節目の写真を撮ってもらったり、とにかく私にとっては身近だった。

その木が倒れて、私は淋しさを感じた。何か大事なものがなくなったような感覚…。しかし、しばらくすると、その感覚は薄れた。倒れた木の奥に、今まで見ることがなかった景色が見えた。私はその景色を見た時、淋しさ以上に、なぜか嬉しさを感じた。

別れと新たな出会いが必ずあるこの時期…。皆さんは何を感じていますか。それでは、また。

区切りと新たなスタート

3月といえば、卒業、年度末、決算等々、世間では区切りの月として意識されることが多いのではないだろうか。そこには別れがあり、また別れがあれば次なる出会いがあり、この月は期待や不安を伴う、ある意味不安定な月なのかもしれない。何となく毎日を過ごしていると、区切りを意識せずに通り過ぎてしまうこともある。同じことの繰り返しの機械の一部になったような生活の中では特にそうなのではないだろうか。

銀河の里では、新年度の体制でスタッフの異動が行われた。それに伴って、グループホームも次のステージに移った感がある。役者が代わり、物語も変わっていく。新しい物語が動き出す。新しい物語の始まりを受け入れる時、それまでの自分を振り返り、改めて意識することが必要な気がする。

区切り、そこで切れるのではなく、次へをイメージするための区切りとでもいうべきか。自分の立っている位置を振り返る時というのがあると思う。機械の一部になってしまわないように…。

4月もスタートし、入居者と新しいスタッフと展開される物語を感じ、味わって、それを皆さんにお届けしていきたいと思います。（板垣）

廻る季節

今年は寒い日が続く中、全部で3回行う種まきの第一回目を4月6日に行い、4月10日に芽が出た苗箱をハウスへ運ぶ作業をしました。全ての作業が年に一度その時にしか行わない作業で、やっと大枠の流れとその作業量が頭に入ってきたところです。今年はそれぞれの作業をどうやるか、という視点に立つことが出来るとも考えています。

農業を基盤とする銀河の里で、農業を担当して3年目を向かえ、今年は何か目に見える成果を出したいと思っています。（松坂）

本格始動！

箱並べも農業班中心

利用者の誕生会で思うこと

花巻温泉へ…

お刺身盛り合わせ

先日、デイサービス利用者で誕生日を迎えた方がおり、家族も含め、皆でそのお祝いをした。

まずはその方と温泉へ。その後、昼食はワークステージ特製の豪華お弁当とお刺身の盛り合わせ。どちらも本当に喜んでくれ、普段なかなか見ることができない、いろいろな表情を見ることができた。

もちろん、誕生日を迎えた本人は皆にお祝いされ嬉しそうだったが、私が不思議に思うのは、その本人ではなく周りの利用者、スタッフも良い表情をしていたことである。私はその雰囲気が好きである。

今後も、誕生会をただするのではなく、そこで見えてくるものを感じていきたいと思う。（清水）

つながれることの嬉しさ

私は、この1年間在宅介護支援センターのソーシャルワーカーとして、地域へ出て、様々な人と関わってきた。だが、やはり始めは人と関わることに不安ととまどいを感じていた。「何とかして話さなければならない、つながらなくてはならない」そんな義務的な感覚が強かったように思う。だが、やがてその感覚のままでは私自身の姿も見えてこないことに気が付いた。何より私自身が不自然で、口調や表情もいつもとは違うと感じるようになった。

しばらくして、その義務的な感覚はなくなった。それから私は、出会う人と冗談を言い合って笑ったり、感情を共有して泣いたり、また時に息子や孫のような立場で自分の気持ちを伝えたり、いろいろな姿を見せてきた。そこには、私だけではなく、それを受け止めてくれる人の存在があり、そのおかげで私もいろいろな姿を見せることができたのではないかと思う。

最近、私はある方を訪問した。談話すること1時間…。その1時間は私にとって、何か特別なものとして心に残った。その方と会うのはその時が初めてで、年齢的にはおよそ50歳ぐらい離れている。共通の話題はもちろんほとんどなく、普通であればつながることは望めないのかもしれない。だが、その時は1時間の中でつながれたと感じた。そしてまた会いに来たいと思えた。それが本当に嬉しかった。

私にとってこの1年は、つながれることの嬉しさを実感した1年だったと思う。いろいろな人と出会い、同じ時間を過ごす。そこに表面的ではないつながりを実感する。「こころ」のやりとりを実感する。確かに仕事ではあるのだが、単なる仕事とは思えなかった。今は改めて出会いを、そして関わりを楽しみとして受け止めることができる。私自身のこれからを楽しみにしたい。（清水）

みつさんを偲ぶ

みつさんが亡くなった。86歳だった。彼女が居なければ「銀河の里」は生まれなかった。準備期間中ずっと黙々と草取りをしながら影で支えてくれた。「弱法師」という能の演目がある。その弱法師にみつさんのイメージが重なる。一人暮らしの老いたみつさんは誰からも相手にされない弱法師に近い。小さい体に曲がった腰、やっと歩けるかのような老体はまさに弱法師そのものだ。弱法師は目が見えないが故に、鮮やかにみることのできた異界の光景があった。同じようにみつさんには存在の迫力があった。みつさんが座っているだけで畑の草は一本も無くなった。どうやって背負ったのか、大量のえさを背中にしょって町から帰ってきた。氷の張った池に入って池の掃除をしていたこともある。他には笑顔を絶やさず、小言すら言わない代わりに、内面ではいつも何かを気にかけている人だった。そんな彼女のおかげで里が生まれたことを改めて感じる。「ありがとう」と伝えたい。（健）

銀河の里のお店が遂に登場！花巻温泉「さくらまつり」出店のご案内

日時：4月22日（土）～5月7日（日）

営業時間：　平日16：00～19：00

土日祝日10：00～19：00

おにぎり・肉まん・餃子・豚汁・ホット梅酒、紫蘇チューハイ他

只今企画中！！

皆さん、是非いらして下さい。里の自慢の味と満開の桜はいかがです